

# 『とりかへばや物語』をどう読むか——『源氏物語』の影響を踏まえて——

安 齋 花那 恵

## はじめに

『とりかへばや物語』は物語作成に当たって『源氏物語』の影響を受けている作品とされている。この物語は、幼少期から「男らしさ」「女らしさ」が見られなかった男女のきょうだいを、父の大納言が二人の性を取り替え、それぞれの人生を歩ませるところから始まる。自分の生き方、在り方について苦悩しながらも生きる登場人物が、感情豊かに生き生きと描かれている。

本稿では、『源氏物語』の影響を指摘する先行研究の再検証を行いつつ、『とりかへばや物語』がどのような物語として見ることができているのか述べていく。

## 一、先行研究の確認

『とりかへばや物語』が『源氏物語』のこういった部分から影響を受けているのか、確認する必要がある。『源氏物語』と『とりかへばや物語』が類似する部分について、鈴木弘道氏は「『とりかへばや物語』の研究」で次のようにまとめている。<sup>(注1)</sup>

(A) 四の君のもとに忍び入った宰相を、四の君が、その夫の中納言(女)であると思ひ誤るのは、浮舟巻にも類

似場面がある。

(B) 中納言(女)が扇や畳紙によって、四の君のもとに忍び入った男を宰相だと知る趣向は、賢木巻に先蹤がある。

(C) 中納言(女)の見つけた扇により、四の君を犯した男が宰相であることを知って煩悶するのは、若菜下で、源氏の見つけた柏木の手紙により、女三の宮を犯した男が柏木であることを知って煩悶するのに類似する。

(D) 宇治の大将(女)が尚侍(男)とともに帰京する時、反古を引き破り焼きなどしたのは、幻巻の源氏の末路、浮舟巻の浮舟の入水前のことなどによつた趣向であらう。

(E) 今大将(男)が新造の二条殿に吉野の姫君たちを引取ることは、匂宮が新造の二条殿に中の君を引取るのに類似する。

(F) 帝が宣耀殿で今尚侍(女)の碁を打つ有様をかいまみて、密通するのは、空蟬巻によつたものであらう。

(G) 今大将(男)が中納言のために、吉野の中の君を手引きして逢わせるのは、薫が宇治の中の君を匂宮に取持つのに類似する。

(H) 南殿の桜を鑑賞する宴は、花宴と類似する。

鈴木氏は場面に着目し、以上のように類似点をまとめている。他にも違つた面で見れば類似する部分は多々あることだろう。このことについては、二節で触れていくことにする。

鈴木氏が挙げたこれらについて再検討・再確認をしたところ、総じて正しいと言えるが(E)については、修正が必要であると考ええる。まず、『源氏物語』の該当箇所は、総角巻の以下の場面である。

かの宮よりは、「なほかう参り来ることもいと難きを、思ひわびて、近う渡いたてまつるべきことをなむ、たばかり出でたる」と聞こえたまへり。(中略)二条院の西の対に渡いたまひて、時々も通ひたまふべく、忍びて聞こへ

たまひければ、女一宮の御方にこと寄せて思しなるにやと思しながら、おぼつかかなるまじきはうれしくて、のたまふなりけり。

(総角卷・三四〇頁)

これは、匂宮が宇治の中の君を二条院に引き取ろうと計画している場面である。山里である宇治から、京の二条院へ引き取ろうとしていることになる。

一方、『とりかへばや物語』が影響を受けているとされるのは次の場面である。

大將殿は、年返らんままに吉野山の女君迎へきこえんと思して、二条堀川のわたりを三町築きこめて、三葉四葉に造りみがきたまふ、いとめでたし。

(卷四・四四五頁)

これは、男君が年が明けたら吉野の宮の姫君を引き取ろうと、二条堀川殿を作っている場面である。

自分に関わりある女性を、屋敷に住ませようとする構想は類似していると言える。しかし、『源氏物語』では、匂宮は新造した住まいに中の君を引き取ってはいない。二条院は元々匂宮が所有していた。この頃、新しく作っていたのは薫の三条宮である。したがって、匂宮が新造の二条殿に中の君を引き取ったことは修正しておくべきであろう。また、(F)についても問題がある。『源氏物語』の空蟬卷には次のようにある。

さて向かひみたらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて簾のはさまにいらたまひぬ。

(空蟬卷・一一九頁)

これは、光源氏が空蟬と軒端萩の碁を打つ姿を垣間見する場面である。一方、『とりかへばや物語』には次のような場面がある。

葎などは下ろしてけるに妻戸のいまだかからざりける、風に吹き開けられたる、うれしくて、やはら入らせたまへど、知る人もなし。暗き方に立ち隠れて御覧ずれば、人二人ばかり居て碁打つなるべし。督の君は、帳のうちに琴を枕にて寄り臥して、手まさぐりにそこはかとなく掻き鳴らして、灯をつくづくとうちながめてものをいとあはれと思ひたる（中略）大きやかに結びたる文を御ふところより引き出でさせたまひて、ただ大方なるようにて、「尚侍に聞こえんことを、殿のゆるされありし後何となくて今までになりけるを、今日よき日なれば、たてまつりて、やがて御返見せたまへ。」

（巻四・四四七頁）

これは、帝が女君への想いが募り宣耀殿へ足を運んだ際、妻戸が風で開いたためそこから垣間見をする場面である。隠れてご覧になっていると、女房二人が碁を打ち、女君は碁を枕に寄りかかりしんみりと考え込んでいる。

鈴木氏は「尚侍の碁を打つ有様を垣間見て」と述べているが、引用部分を読んでいただければ分かるように、実際碁を打っていたのは近くに居た女房たちであつて尚侍ではない。この点は修正しておくべきであらう。

以上のように、若干修正すべき点が認められるが、類似点があることは認めて良い。

## 二、物語の恋歌における「三瀬川」の影響関係

第一章では、鈴木氏の挙げた八箇所『源氏物語』と『とりかへばや物語』の類似点の見解について確認した。二節では、二つの作品を読んでいて自分なりに気づいた類似点を挙げる。

宰相中将が四の君へ詠ったものと、帝が尚侍へ詠ったものに「三瀬川」を用いているのは、『源氏物語』真木柱巻において、光源氏と玉鬘が「渡り川」を用いた歌のやりとりからであろう。

「おりたちて汲みはみねども渡り川人のせとはた契らざりしを

思ひのほかなりや」とて、鼻うちかみたまふけはひ、なつかしうあはれなり。女は顔を隠して、

みつせ川わたらぬさきにかでなほ涙のみをのあわと消えなん

(真木柱巻・三五四頁)

これは、鬚黒と結婚してしまった玉鬘の元を光源氏が訪れる場面である。光源氏は「渡り川」すなわち三瀬川を用いた贈歌で、三途の川を渡る時に玉鬘が、他の男の背に乗ることを恨んでいる。これに対し、玉鬘は「三瀬川」を用いて、三途の川を渡る前に泡となつて消えたいと返しており、不本意な結婚であることを訴えている。

このような場面があることを踏まえたうえで『とりかへばや物語』を見ていくと、歌の中で「三瀬川」が用いられていることに気付かされる。以下に、その二例を挙げていく。

#### a、宰相の歌

「わがためにえに深ければ三瀬川後の逢瀬も誰かたづねん

なほ思し知らぬこそかひなけれ」と言へど、

(巻一・二〇八頁)

これは、人妻（中納言の妻）である四の君と関係を持つことができたが、夜が明けたため退出しなくてはならない場面で詠んだ歌だ。宰相は中納言よりも自分の方が、縁が深い意味合いを含め「三瀬川」を用いて、三途の川を渡る時あ

なたを背負うのは私だと訴えかけている。

b、帝の歌

「三瀬川後の逢瀬は知らねども来ん世をかねて契りつるかな

この世ひとつの契りはなほあさき心地するを、いかがあらんと思ふなん口惜しき」とのたまはするまに、

(巻四・四五二頁)

これは、女君と関係を持つことができた帝が、退出なさる場面で詠んだ歌である。「三瀬川」を用いて、来世で逢うことを約束している。

以上三つの原文より、どちらの作品にも歌の中に「三瀬川(渡り川)」が用いられていることが確認できる。

「三瀬川」と「渡り川」はどちらも冥土の三途の川のことを指している。「歌ことば歌枕大辞典」では「渡り川」について次のように記されている。(注2)

水・雨・波、深瀬などの縁語をよびおこし、恋の歌として「逢瀬」とあわせて詠まれる例が比較的目的がつく。『平中物語』「渡り川いかでか人ののがるべき音にのみやは聞かむと思ひし」『源氏物語』「おりたちて汲みはみねども渡り川人のせとはた契らざりしを」『狭衣物語』「後の世の逢瀬を待たん渡り川別るるほど限りなりとも」など、作り物語世界に多いのも特徴であろう。

三途の川を指す言葉は、死をイメージするため悲しみを表す時や、相手を悼む際に用いられると考えがちになるが、実は恋の歌として詠われるのである。また、当時女性は死ぬと初めて関係を持った男に背負われて、三途の川を渡るといふ俗信があった。このことをふまえ歌を分析していく。

まず、光源氏の歌から。「渡り川人のせとはた契らざりしを」の部分から、「三途の川を渡る時ほかに男の背に乗るとは約束していなかったのに」と解釈できる。つまり、本来なら、あなた（玉鬘）は誰のものにもならず、三途の川を渡る時は、私（光源氏）が背負うはずだったのにと、悔やむ気持ちが表示されている。玉鬘の歌は「三瀬川」を用いて、不本意な結婚であることを訴えている。この二人の贈答歌は、いずれもやりきれない恋の歌の例として「渡り川」「三瀬川」を用いていることがわかる。

先掲の『歌ことば歌枕大辞典』が挙例する『平中物語』一六段には、次のような男女の贈答歌がある。(注)

さて、つとめて、女、

音にのみ人の渡ると聞きし瀬をわれものがれずなりにけるかな

返し、男、

渡り川いかでか人ののがるべき音にのみやは聞かむと思ひし

ここでは、女が「渡ると聞きし瀬」と三瀬川を読んでいることを受けて、男も「渡り川」と詠んでいる。確かに「渡り川」は三途の川のことを指しているが、『平中物語』の「渡り川」は、人生において男女の逢瀬を渡ることや、三途の川渡ることは逃れることのできないものとして詠んでいると考えられる。

一方、『源氏物語』の場合は、先述の大意からわかるように、両者とも明らかに三途の川を意識して詠んだものだと考えられる。ここでの「三瀬川」という死後に渡る川は、光源氏の叶わなかった恋情と、玉鬘の不本意な結婚とに強く関連づけられている点は、『平中物語』と異なる点であると考えられる。

次に『とりかへばや物語』の歌を見ていきたい。a 宰相の歌は、「えに深ければ」の部分で「江に」「縁に」を掛けることで、中納言よりも、自分の方が縁が深かったことを表している。「三瀬川後の逢瀬も誰かたづねん」からは、「三途の川で逢うのは他の誰かではなくこの私だ」と、遠回しに自分が四の君の最初の相手であり、四の君を背負うの

は私なのだと言っている。四の君の夫と何かと比べたがり、自分の方が本来夫となるべきだったのだと、訴えかけているように捉えることができる。

b 帝の歌は、「三途の川の意味を表す語と「逢瀬」が用いられていることから、はっきりと恋の歌であることがわかる。「三瀬川後の逢瀬は知らねども」の部分は、死後に三途の川で逢うことができるか、わからないことを意味している。「来ん世をかねて契りつるかな」で「来世で逢うことを前もって約束しましたよ」と生まれ変わってもまた尚侍（女）と共に在りたいという気持ちが表れている。また、三途の川で逢うことが難しいことから、尚侍にとつて帝は最初の相手ではないことがわかるだろう。しかし、帝はそのようなことを責めずに、来世を考えていることから、帝の広い心と大きな愛を感じる。

この三つの歌は、ただ「三瀬川（渡り川）」を歌に用いた点が類似しているわけではない。歌の内容はそれぞれ違えど、光源氏や宰相、帝が歌に「三瀬川（渡り川）」を用いることにこだわったのは、死んでもなおまた逢うことができる点や、共に川を渡ることでも来世でも一緒になることができるのでないかといった点から、相手の女性に対しての執着心や、独占欲といった感情からきていると考えることができる。

つまり、『とりかへばや物語』は、先行する物語の中でも特にやりきれない恋のイメージを持たせた『源氏物語』を踏まえて「三瀬川」を用いたと考えられる。

鈴木氏の挙げていた場面の類似以外にも、『源氏物語』との類似を確認できた。紙幅に限りがあるため、ここでは詳細には論じないが、他にも『源氏物語』の葵の上と『とりかへばや物語』の四の君の類似なども挙げられる。以上のことから、『とりかへばや物語』が『源氏物語』の影響を受けていたことが、より浮彫になったことだろう。

### 三、光と表現される女君

これまで、『とりかへばや物語』と『源氏物語』の類似点を中心に見てきた。そのことを踏まえ、『源氏物語』から影



響を受けている中で、『とりかへばや物語』が描き得たものを検証していく。

長谷川愛氏は、『とりかへばや物語』研究―異装の姫君の物語―<sup>(注4)</sup>にて、『源氏物語』での「光君」や「光源氏」といった「光」が用いられている点から、『とりかへばや物語』での「光」の用途に注目し、『とりかへばや物語』は「成物物語」と見ることができ、実は「挫折物語」であると述べている。この見解について考察していく。まずは、「光」が用いられている箇所を挙げていく。なお、該当箇所と共に、誰から誰への表現なのかも記すことにする。

替後 入れ わり	失踪時	異装の時	該当箇所本文	誰から誰へ	該当ページ
		<p>I いとど世になく玉光る男君さへ生まれたまひにしかば、</p> <p>II 月影に光るばかりめでたく見えて、</p> <p>III 光を放ち、はなばなとめでたく、</p> <p>IV 目もあやなる光ぞこよなかりけるかしと見るに、</p> <p>V 御容貌の光るばかり見ゆること、</p> <p>VI いみじかりつる世の光の失せぬることを思しめし嘆き、</p> <p>VII 世の中に光さすべきかげの雲にまがひなばかりにくれ惑ひたり。</p> <p>VIII わが身の光ある心地して瀬もしくうれしくおぼえしか、</p> <p>IX はなばなと光るやうににほひて、</p> <p>X 雲の上も闇にくれたる心地して光も見えずたどりあひつる</p>	<p>作者↓男君</p> <p>宰相↓女君</p> <p>吉野の宮↓女君</p> <p>宰相↓男君</p> <p>両親↓女君</p> <p>帝・院↓女君</p> <p>人々↓女君</p> <p>男君↓女君</p> <p>男君↓女君</p> <p>帝↓男君</p>	<p>卷一・一六五頁</p> <p>卷一・一八九頁</p> <p>卷一・二三七頁</p> <p>卷一・二六七頁</p> <p>卷二・三〇二頁</p> <p>卷三・三二八頁</p> <p>卷三・三二九頁</p> <p>卷三・三四〇頁</p> <p>卷三・三四八頁</p> <p>卷三・四〇三頁</p>	

『とりかへばや物語』をどう読むか——『源氏物語』の影響を踏まえて——

「光」が用いられる箇所を長谷川氏が挙げたものを参考に、表にまとめてみた。ここで一つ訂正したいところがある。長谷川氏は、Xの箇所は「帝↓「大将」(女君)」と記している。しかし、本文を確認してみたところ、帝が大将に向けて用いたことは違いないが、この箇所は男君と女君は異装を解き本来の姿に戻った後なので、正しくは「女君」ではなく「男君」とするべきだ。表現箇所の前後からも、帝の前に参上したのは男君の方であることがわかる。また、帝は、大将が失踪するまでの間、女君が男性の格好をして出仕していたことを知らない。そのため、帝が女君に向けた表現と考えることはできない。

女君が「光」と表現された箇所はⅡⅢⅤⅥⅦⅧⅨの七箇所であった。それに比べ、男君はⅠⅣⅩの三箇所だった。長谷川氏は「成功物語」として見る事ができるが、その実体は女の「挫折物語」と見ることができると述べている。そこでまずは、こういった部分から「成功物語」と見ることができると考えていく。

女君の「光」と表現された箇所の内、ⅡⅢⅤⅨは容姿の素晴らしさを表現する時に用いられており(光a)、ⅥⅦⅧは女君が帝や人々、男君にとって世の期待の星であり、世を照らし導いてくれる存在、支えてくれる存在であったことを表すために用いられている。容姿に不足無く、帝や人々、男君からは必要で大事な存在とされていた。(光b)そのような中で、自分の身の在り方や宰相、四の君との関係に苦悩しつつも乗り越える。最終的には元の性別に戻り、帝から寵愛され誰もがうらやましがる位に就くことになる。これらを踏まえると、「成功物語」と見ることができると見解

次に、こういった部分から「挫折物語」と見ることができると考えていく。長谷川氏は「挫折物語」であると見解した理由を次のように述べている。<sup>(注)</sup>

物語の超越的主人公である女君の「光」をも失わせることによつて、当時の女が「女」という枠組みによつていかに制限されていたか、また、女の生なまが生きがたいものであつたかを浮き彫りにしているといえる。

ここで、女君が失つた「光」とは何のことなのか考える必要がある。異装を解き、元の性別に戻るまでは、女性とし

て生きることができない点を除けば失ったものはないと見える。そうになると、女君は元の性別に戻ってから失ったことになる。容姿については、本文に次のように記されている。

同じ内裏ながら今までよそ人に思ひて過ぎにけるもありがたく思し知られて、

(巻四・四四八頁)

見る目有様の類なきに何の罪も消え失せぬる心地して、

(巻四・四五二頁)

帝が、「これほど美しいひとを見過ごしていた」「類なる美しさにどんな罪も消えてしまふ気がする」などと思つてゐることから、「光a」の容姿については問題なかつたことがわかる。つまり、女君が失つたのは「光b」の「世の光として導く存在、他者から必要とされる存在」だつたことが明らかになる。長谷川氏は、物語で女君からこのような「光」を失わせることで、異装していたからこそできていた男としての仕事や自由な行動などが、女性に戻つたことでできなくなつたことから、何かと制限され生きがたいものだつたことを浮き彫りにしていると捉え、「挫折物語」と見たといふことがわかる。しかし、物語の流れから考えると、女君が挫折したと見ることは妥当なのだろうか。『源氏物語』との類似点から考えるとどうなのか。このことについては、次節において考えていきたい。

#### 四、『源氏物語』での光

『とりかへばや物語』での「光」という言葉に注目してきたわけだが、ここで『源氏物語』の中では、どのような意味合いがあり、使用されているのか見ていく必要があるだろう。

物語内で「光」は、「光る君」や「光る源氏」などと主人公である光源氏の呼称に用いられており、「なほにはほしさ

はたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞ゆ。」(桐壺卷・四四頁)とあるように、世の中の人からの賛称の意味合いが多い。この様な意味合いをもった呼称が用いられていた巻を大まかにまとめると次のようになる。なお、括弧には光源氏の年齢を記す。

1、桐壺卷・帚木卷・若紫(一〇代)

2、玉鬘卷(三五歳)

3、匂宮卷・紅梅卷・竹河卷・手習卷(没)

1からは、特に若き日の恋愛にまつわる主人公の呼称であることがわかる。2の玉鬘卷は、1のことを明確にしている。以下に、該当箇所を挙げる。

昔、光る源氏などいふ名は聞きわたりたてまつりしかど、年ごろのうひうひしさに、さしも思ひきこえざりけるを、ほのかなる大殿油に御几帳の綻びよりはつかに見てたてまつる、いとど恐ろしくさへぞおぼゆるや。

(玉鬘卷・一二九頁)

これは、十数年ぶりに京に上がってきた玉鬘の乳母たちが「昔」光源氏と呼ばれていた主人公にお会いした場面である。このことから、玉鬘卷では主人公は若い頃のように、光源氏と呼ばれていなかったことがわかる。

3からは、光源氏は亡くなっているが、容姿などでの比較対象や過去に眉目秀麗な人がいたといった昔話として用いられている。

これらを総じて、「光源氏」や「光る君」といった呼称は、あくまで男性につけられたものであり、加えて、主人公の若き日の恋愛にまつわる際に用いられていたと言つてよい。主人公が成熟し、安定した立場を得た後にはこれらの呼

称は用いられていないのである。

確かに、『とりかへばや物語』の女君は、男装時に「光」のイメージを持って描かれている。では、長谷川氏が述べていたように『とりかへばや物語』において、女君は挫折していると本当に言えるのだろうか。

物語の中で女君が「男性と同じような仕事がしたい」「自分の可能性を試したい」「制限されることなく自由に生きたい」といった描写があったわけではない。女性に戻り「光b」を失ったから「挫折した」と見るのは難しい。少なくとも、女君は異装をしている際の、性別を偽ることや自分の生き方についての悩みが解消されたので、心は軽くなったのではないかと考えられる。そもそも、女君も男君も「帝の后になる」や「権力を持ちたい」などといった明確な目標や自分はどうしたいといった欲が、はっきりと描かれていないので、そういった点でも難しいのではないか。

加えて、これまで『源氏物語』での主人公の呼称に用いられる「光」について考察してきた。「光源氏」や「光る君」といった呼称は、主に若い頃に用いられていたため、年を重ね安定した立場を得ると用いられなくなった。このことから、「光」が用いられなくなったのは、光源氏が「落ちぶれた」といったマイナスのイメージからではなく、立場・中身・見た目とも素晴らしい男性に成熟したため、「光」を用いる必要がなくなったとプラスの方に考えられる。つまり、挫折を意味していないのである。二節で述べてきたように、『とりかへばや物語』が『源氏物語』の影響を受けていることを踏まえると、『とりかへばや物語』の女君が「光」と呼ばれなくなることが挫折を意味しているわけではないと考えられる。「光b」の「世の光として導く存在、他者から必要とされる存在」は失われたと考えられるが、異装をしている際の、性別を偽ることや自分の生き方についての悩み解消を考えたと、プラスのイメージができる。また、素晴らしい女性になり国母という確かな立場を得たことで「光」を用いる必要がなくなったと考えられる。寧ろ、異装していた頃の男性としての「光b」は失ったが、女としての「光b」を新しく手に入れたと考えると、たとえ「光」と呼ばれなくなったとしても挫折には結びつかないのである。

## おわりに

一節では鈴木氏の『とりかへばや物語』と『源氏物語』の類似点についての見解をまとめてきた。若干修正が必要な部分認められるが、物語の場面などの類似は認めて良い。加えて、二節では、和歌の中に「渡り川」と「三瀬川」を用いることで、やりきれない恋のイメージを持たせたという類似点について述べてきた。これらを総じて、『とりかへばや物語』は『源氏物語』の影響を受けていたということがわかる。

三節では、長谷川氏の『源氏物語』での「光君」や「光源氏」といった「光」が用いられている点から、『とりかへばや物語』での「光」の用途に注目し、そこから『とりかへばや物語』は「成功物語」と見ることができるとは、実は「挫折物語」であるという見解について考察してきた。ここで、「成功物語」として見ることができるとは、「挫折物語」として見ることは妥当なのか疑問がでた。このことについて、四節にて『源氏物語』での「光」は挫折を意味するの考を、一・二節で確認できた影響を踏まえた上で、『とりかへばや物語』の女君が「光」と呼ばれなくなることが挫折を意味しているわけではないと判断した。つまり、「挫折物語」と見ることができない。

『とりかへばや物語』を「成功物語」や「挫折物語」と見ることができるという見解があるわけだが、私は「成長物語」として見る。幼少期から男としての人生を歩み、そのような中で、自分の身の在り方や宰相、四の君との関係に苦悩しつつも乗り越える。最終的には元の性別に戻り、帝から寵愛され誰もがうらやましがれる位に就くことになる。これは、女君が自分の生き方に苦悩しながらも、男として宮中で仕事をし、吉野の宮と語らうことで、本来女として生きていては知りえなかったことを学び、経験し糧とした。このことを踏まえ、自分の生き方について考え、決断した結果である。女君の人間としての成長が窺われる。

注

『とりかへばや物語』と『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集』により、引用部の末尾に巻名とページ数を示した。

- 一 鈴木弘道『とりかへばや物語の研究』（笠間書院・一九七三年）
- 二 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典第二版』第五卷（小学館・二〇〇一年）
- 三 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子『新編日本古典文学全集』二 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語（小学館・一九九九年）四八〇頁
- 四 長谷川愛一『とりかへばや物語』研究―男装の姫君の物語―『日本文學』第一〇二号（東京女子大学・二〇〇六年三月）
- 五 注4に同じ